

A 語句の意味と読み

(1) ひととせ／ある年・先年 / 「いちねん」ではない。昔の出来事を語り出すときの言い方

(2) さくもん／漢詩（を作ること） / 「さくぶん」と読むと×。作文の舟＝漢詩の舟

(3) （その道に）すぐれている・十分な力がある / 動詞「堪ふ」の連用形＋存続の助動詞「たり」

(4) 残念だ・くやしい・もの足りない / 現代語の「口惜しい」より広く使う

(5) 得意になること・いい気になること / 「おごり」＝思い上がり。ここは誇らしさ

(6) ～さえ / 軽いものを挙げて、より重いものを押し量らせる副助詞

B 文法

(7) 尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給ひ」。尊敬語を二つ重ねた二重敬語（最高敬語）である。 / ★「させ」を使役と訳さない。「逍遙せ」はサ変「逍遙す」の未然形で、この「せ」は敬語ではない

(8) 尊敬（～なさる）の助動詞「る」 / 貴人である公任の動作を高めている。受身・可能・自発ではない

(9) 疑問の係助詞「か」の結びとなるため、終止形「べし」が連体形「べき」になっている（係り結び）。 / 「か」→連体形。結びの語をたどる練習

(10) 意志（～しよう） / 会話文で主語が話し手自身のときは意志。「(和歌の舟に) 乗りましょう」と訳す

(11) 反実仮想。「もし～だったら、…だろうに」と訳し、実際にはそうしなかった残念さを含める。 / ★「ましかば…まし」を見たら反実仮想。「なまし」の「な」は強意

(12) 自発（自然と～してしまう） / 「得意にならずにはいられなかった」。「し」は過去「き」の連体形で、係助詞「なむ」の結び

C 主語・指す内容・敬意の方向

(13) 藤原道長 / 出家した貴人の敬称。この話の舟遊びの主催者

(14) 語り手から入道殿（藤原道長）へ / 最高敬語は摂関級・天皇級の人物にしか使わない＝道長の地位の高さを示す

(15) この大納言殿＝藤原公任 / 「参り」は謙譲語で道長への敬意、「給へ」は尊敬で公任への敬意

(16) 語り手から入道殿（藤原道長）へ / 「参る」は謙譲語。動作の向かう先（参上した相手）である道長を高めている

(17) 公任から聞き手の入道殿（藤原道長）へ（丁寧の補助動詞） / 「侍り」は丁寧の補助動詞。会話文なので敬意を向けるのは話し手＝公任

D 口語訳

(18) （あの大納言は）どの舟にお乗りになるのだろうか。 / 「る」＝お～になる。なお「べし」の意味は、推量（～だろうか）とする説明と適当（～のがよいだろうか）とする説明があるので、お使いの教科書の説明に合わせる

(19) （紅葉の錦を）着ていない人は一人もいない。 / 「ぬ」は打消「ず」の連体形。打消＋「なし」の二重否定＝強い肯定

(20) 漢詩の舟に乗ればよかったなあ。 / 「作文の（舟）に」と「舟」が省かれている。「ぞ」の結びで「ける」が連体形

(21) これくらいの（出来ばえの）漢詩を作っていたならば、名声が上がることもいっそうまさっていただろうに。 / 「かばかり」＝これほど・このくらい。先に自分が詠んだ「小倉山…」の歌の出来ばえを指す。反実仮想の型（もし～だったら…だろうに）を崩さない

E 内容・記述

(22) 漢詩（作文）の舟・管絃（音楽）の舟・和歌の舟／いずれも当時の貴族が身につけるべきとされた教養の柱で、この三つに通じることが最高の評価とされた。／この三つに通じる才能が「三舟（三船）の才」。舟の名を並べるだけで終わらせない

(23) 見立て（比喩）。散りかかる紅葉の美しさを、色系で織った錦の織物にたとえている。（三十九字）／「着ぬ人ぞなき」と続けて、皆が錦をまとっているように見える、と詠む。なお、この歌の「嵐」は山の名「嵐（山）」と「あらし（強い風）」の掛詞と説明されることも多いので、お使いの教科書の説明もあわせて確認すること

(24) 当時は和歌よりも漢詩（作文）のほうが格の高い正式な教養とされていたから。同じ出来ばえのものなら漢詩で示したほうが、名声はあっという間に上がったはずだと考えたため。（七十八字）／「悔しさ」の理由は、公任の実力不足ではなく当時の序列にある

(25) 道長が乗る舟を一つに決めず「どの舟に乗るのか」と尋ねたこと自体が、漢詩・管絃・和歌の三つの道すべての名手だと世に認められている証拠だと感じられたこと。（七十五字）／「悔しさ」と「誇り」が同居するのがこの章段の読みどころ。設問は「何を」なので、文末は「～こと。」でそろえる

F 文学史・作品常識

(26) 『大鏡』／歴史物語／平安時代後期に成立（作者は未詳）。『栄花物語』とともに藤原道長の栄華を描く。「四鏡」の第一

(27) 大宅世継・夏山繁樹という二人の長寿の老人が語り合う、対話（座談）形式で語られる。／冒頭「雲林院の菩提講」で二人が出会う設定。記述は紀伝体

(28) 漢詩・和歌・管絃の三つの道すべてにすぐれた才能のこと／藤原公任／この逸話から生まれた言葉。公任は『和漢朗詠集』の撰者としても有名

【現代語訳（全文）】

ある年、入道殿（＝藤原道長）が大井川で舟遊びをなさったときに、漢詩の舟・管絃の舟・和歌の舟と（三つに）お分けになって、それぞれの道にすぐれている人々をお乗せになったが、この大納言殿（＝藤原公任）が参上なさったのを（ご覧になって）、入道殿が、「あの大納言は、どの舟にお乗りになるのだろうか。」とおっしゃると、

（大納言は）「和歌の舟に乗りましょう。」とおっしゃって、お詠みになったのだよ、

小倉山や嵐山から吹きおろす嵐（強い風）が寒いので、（散りかかる）紅葉の錦を着ていない人は一人もいないことだ。

（自分から和歌の舟を）申し受けなさっただけのかがあって、みごとにお詠みになったことよ。

（公任）ご自身もおっしゃるということには、「漢詩の舟に乗ればよかったなあ。そうして、これくらいの（出来ばえの）漢詩を作っていたならば、名声が上がることも（和歌よりも）いっそうまぎっていただろうに。残念なことをしたものだなあ。それにしても、殿（＝道長）が、『どの舟に（乗ろう）と思うか。』とおっしゃったときには、われながら（三つの道すべての名手と認められたのだと）得意にならずにはいられなかった。」とおっしゃるそうだ。

一つのことにはすぐれるのさえ（難しいことで）あるのに、このようにどの道にも抜きん出ていらっしやったとかいうのは、昔にもございませぬことだ（＝前例のないすばらしさだ）。